刻む記憶

抵抗パッチワーク

北アイルランド　チリ独裁下の圧政告発

どんよりと曇った空からひょうが降りしきり、若葉を伸ばし始めた木々を激しく打つ。英国北アイルランド北部の町リマバディー。東西10キロ以上まっすぐ続く海岸線から吹き付ける風は5月を前にしてもまだ冷たい。

その町の外れにある自宅の居間で、ロベルタ・バシック（65）は、手元に置いている何枚ものパッチワークを見せてくれた。

黄色、水色、ピンク、色とりどりの建物が並ぶ町の風景を画用紙ほどのサイズに縫い合わせた布で表現、その上に通りを行き来する親指大の人形たちが縫い付けてある。

涙の染みた布

一見すると和やかな日常だが、人形に向け白い糸をのばす不気味な機械の存在にすぐ注意が向く。糸を吐く機械は、政府の放水車で、水が路上の物売りを追い払う様子を表している。チリでは1970～80年代、ピノチェト独裁体制への抵抗の意志を込めたこんな作品が数多く作られた。

警察に捕まり行方しれずとなった人を捜す家族、食料を買えず炊き出しに並ぶ人々―。バシックが腰をかがめて布にかかった薄い紙を取り払うたびに、悲しいデザインが現れる。燃え終わった暖炉のまきと自家製いちごジャムの香りがただよう暖かい雰囲気の部屋が、しんと静まりかえった。

民衆の暮らしを描く南米チリの伝統的なパッチワークは、スペイン語で麻の生地を指す「アルピジェラ」の名で知られる。野菜や小麦を入れる麻袋を、布を縫い付ける下地に使うため、この名が付いた。

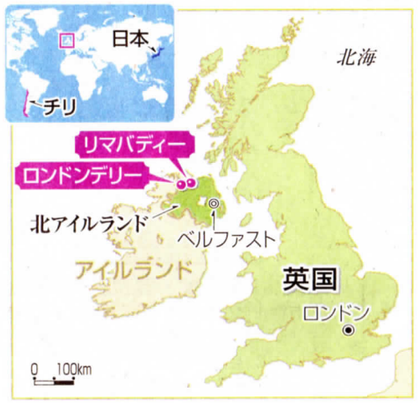
「だれが縫ったのか今となっては分からないのよ。でも何十年も前、チリの貧民街に暮らしていた女性であることは間違いないわ」。独裁体制下、アルピジェラは国際人権団体などを通して国外に売られ、圧政を告発するとともに、わずかばかりの金銭を作者たちにもたらした。

「布に染みこんだ彼女たちの涙が見えるみたい」。バシックは1枚1枚にいとおしげなまなざしを向ける。

全てを変えた日

「あの日を境に全てが変わってしまったわ」と振り返るバシック。生まれ育ったチリの首都サンティアゴにある大学で英語と哲学を教えていた73年9月11日、アウグスト・ピノチェト将軍によるクーデターが起きた。

チリの独裁体制下やその直後に作られたさまざまなアルピジェラ。（上）路上の物売りを追い払う政府の放水車（中）反政府組織の炊き出しに並ぶ女性たちと、それを阻止する武装警察（下）ピノチェト失脚後に地中から見つかった行方不明者の遺体



展覧会でチリの歴史やアルピジェラに込められた意味を説明するロベルタ・バシック（手前）＝英・北アイルランドのロンドンデリーで

批判者は容赦のない拷問を受け、多くの人が殺害された。「私はそんな国に反対してきたわ。体は無事だったけれど、その代わり大学には残れなかった」

88年のピノチェト失脚後は、弾圧の被害を調べる新政府の組織に参加。その後、チリを離れてロンドンの反戦団体に移り、別の人道支援団体で働く男性と結婚。2004年に夫の故郷の北アイルランドに移り住んだ。

50歳を過ぎて渡った土地でバシックは、若き日に祖国で出会った人々に似た姿を見ることになる。北アイルランドでは1960～90年代、英国からの独立を訴える組織と反対組織との争いが激化、武力闘争で3000人以上が死亡した。

チリのアルピジェラを思い出した。「一番の犠牲者はここでも立場の弱い人々だった。作品に込められた平和への願いは、きっと国も時代も超えて届くと気付いたの」

海外に買われていったアルピジェラを2000年代半ばから探し始め、300枚以上を集めた。08年に北アイルランド第2の都市ロンドンデリーで展覧会を開いたことが評判となり、国内外から注目された。日本、ドイツ、ブラジル、南アフリカ…。国内外で開いた展覧会は70回を超えた。

新たな広がり

今年4月下旬、バシックは新たに始まった展覧会の様子を見にロンドンデリーを訪れた。1枚の作品を前に長くたたずむ見学者の後ろ姿を見つめ、バシックは満足そうな笑みを浮かべた。

布製のアルピジェラの展示には繊細な照明や湿度の調整が必要だ。「もちろん苦労は多いけど、とてもやりがいのある仕事よ。分かるでしょう？」、展示担当のバーナデット・ウォルシュ（41）は笑顔で言う。

ここに貸し出した作品はもう自宅には戻らない。博物館が保管体制を整えてくれたためだ。数年後にはコレクションの全てがここに移ることになっている。

アルピジェラを縫い続けた人々の多くは既にこの世を去った。チリ国内ですら弾圧の記憶は薄らぎつつある。だが、一方でパレスチナ紛争やシリア内戦といった、現在の暴力を題材にアルピジェラを縫う活動が各地に育ってきている。

「物としての作品は残る。作る人の心も生き続けてほしい」。アルピジェラに共鳴する声が少しずつ世界中で広がりつつあることに、バシックは幸せを感じている。

（文・菊池太典、写真・松井勇樹＝共同、敬称略）

記者ノート

縮尺はふぞろいで縫い目も粗い。技術的には洗練されているとは言い難い。だがその拙さは、苦境に耐えながら懸命に布に針をくぐらせ続けた貧しい女性たちの姿と重なり合ってくる。アルピジェラが、見る者の心に強く訴えてくる理由はここにあるのだろう。

アルピジェラは日本国内でも鑑賞することができる。東京外大名誉教授の高橋正明らがチリから取り寄せた110枚以上が、詩人でチリ詩の翻訳者でもある故・大島博光の記念館（長野市）に保管されている。

バシックは2013年にこの記念館を訪れ、北アイルランドを研究する東北学院大准教授の酒井朋子と保管状態などを確認した。命と平和について考えさせるアルピジェラの普遍性を評価する動きが、日本でも生まれている。